

経済・金融
フラッシュ鉱工業生産 24 年 9 月－自動車工場の
稼働停止が響き、7-9 月期は 2 四半期ぶりの減産

経済研究部 経済調査部長 斎藤 太郎

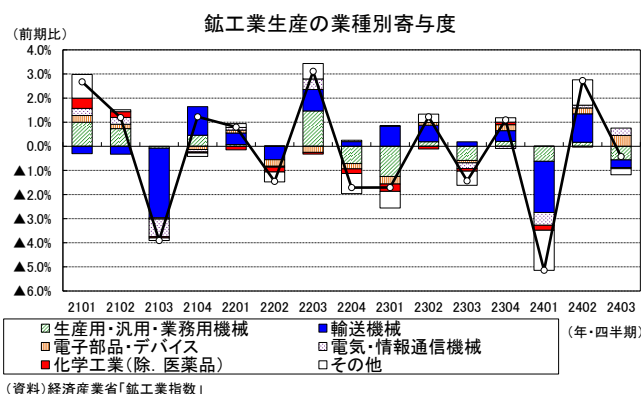
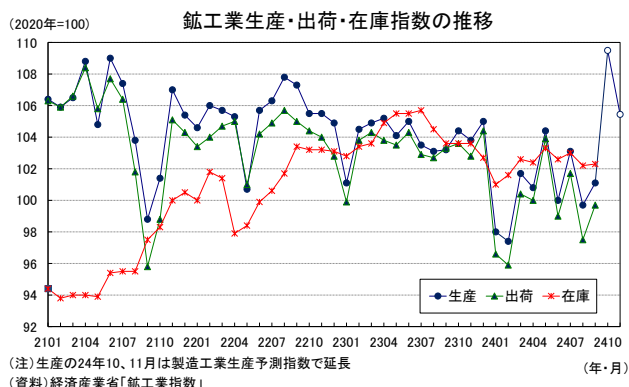
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 7-9 月期は 2 四半期ぶりの減産

経済産業省が 10 月 31 日に公表した鉱工業指数によると、24 年 9 月の鉱工業生産指数は前月比 1.4%（8 月：同▲3.3%）と 2 ヶ月ぶりに上昇し、事前の市場予想（QUICK 集計：前月比 1.0%、当社予想は同 0.2%）を上回る結果となった。出荷指数は前月比 2.3%と 2 ヶ月ぶりの上昇、在庫指数は前月比 0.1%と 2 ヶ月ぶりの上昇となった。

9 月の生産を業種別に見ると、半導体製造装置などの生産用機械は前月比▲1.7%の低下となったが、8 月に台風 10 号の影響で工場の稼働を停止したことから前月比▲10.7%の大幅減産となった自動車、挽回生産で同 7.1%の高い伸びとなり、生産指数を大きく押し上げた。

24 年 7-9 月期の生産は前期比▲0.4%と 2 四半期ぶりの減産となった（4-6 月期：同 2.7%）。業種別には、世界的な半導体需要の回復を受けて、電子部品・デバイスが前期比 7.7%と 4-6 月期の同 4.3%から伸びが加速し、電気・情報通信機械（4-6 月期：前期比 1.4%→7-9 月期：同 3.5%）も好調を維持した。一方、工場の稼働停止の影響が響き、自動車前期比▲4.1%（4-6 月期：同 11.7%）と 2 四半期ぶりの減産となったほか、資本財が多く含まれる生産用機械（同▲5.6%）、汎用機械（同▲2.7%）が落ち込んだ。



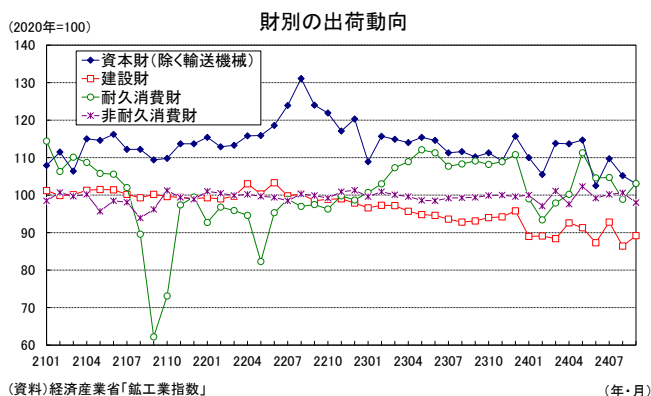
財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷指数（除く輸送機械）は 24 年 4-6 月期の前期比 0.5%の後、7-9 月期は同▲3.9%となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷指数は 24 年 4-6 月期の前期比 1.8%の後、7-9 月期は同▲1.0%となった。

GDP 統計の設備投資は 24 年 4-6 月期に前期比 0.8%と 2 四半期ぶりに増加した。高水準の企業

収益を背景に設備投資は持ち直しているが、7-9 月期は伸びが鈍化することが見込まれる。

消費財出荷指数は 24 年 4-6 月期の前期比 4.7%の後、7-9 月期は同▲1.6%がと 2 四半期ぶりに低下した、耐久消費財が前期比▲3.0%（4-6 月期：同 8.9%）、非耐久消費財が前期比▲0.1%（4-6 月期：同 0.3%）となった。

GDP 統計の民間消費は、認証不正問題の影響緩和に伴う自動車販売の回復などから、24 年 4-6 月期に前期比 0.9%と 5 四半期ぶりの増加となった。7-9 月期は 6 月に実施された所得税・住民税減税による押し上げ効果はあったものの、物価高の悪影響が続くなか、南海トラフ地震臨時情報や台風の接近・上陸を受けて、一部列車の運休、旅行のキャンセル、海水浴場の遊泳禁止などが相次ぎ、夏場の消費が下押しされたことから、伸びが大きく低下する可能性が高い。



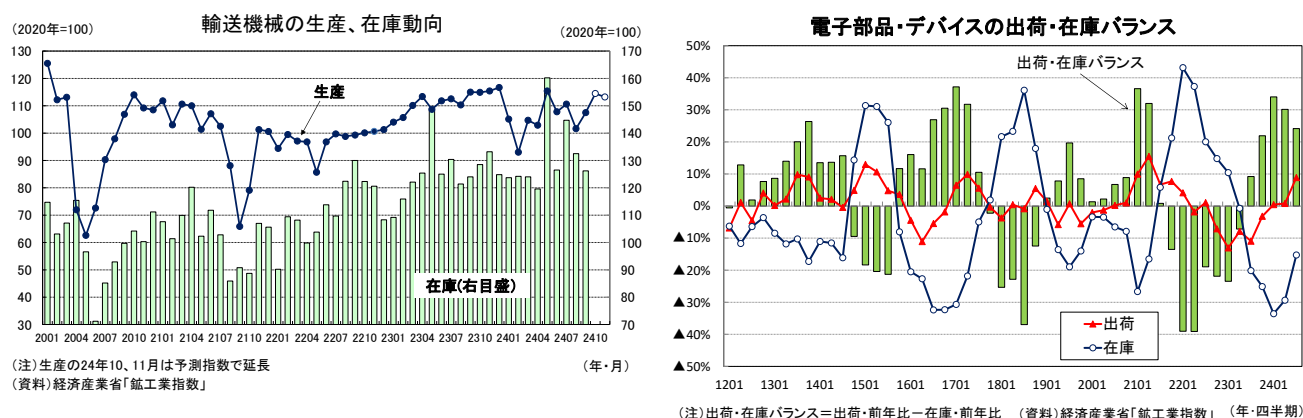
2. 生産は当面一進一退が続く見込み

製造工業生産予測指数は、24 年 10 月が前月比 8.3%、11 月が同▲3.7%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（9 月）、予測修正率（10 月）はそれぞれ▲1.4%、0.6%であった。

予測指数を業種別にみると、工場の稼働停止からの挽回生産で 9 月に前月比 5.8%となった輸送機械は、10 月が前月比 6.5%、11 月が同▲1.1%と持ち直しが続く見込みとなっている。

一方、在庫調整の進展を受けて、好調に推移してきた電子部品・デバイスは 10 月が前月比 0.7%、11 月が同▲4.7%とやや弱めの生産計画となっている。

24 年 7-9 月期の電子部品・デバイス出荷・在庫バランス（出荷・前年比－在庫・前年比）は 24.2%と 5 四半期連続のプラスとなったが、4-6 月期の 30.1%からプラス幅が縮小した。出荷は前年比 8.9%と 4-6 月期の同 0.8%から伸びを高めたが、在庫が前年比▲15.3%と 4-6 月期の同▲29.3%から低下幅が縮小した。生産の牽引役となってきた電子部品・デバイスは、IT サイクルのピークアウトから今後、回復ペースが鈍化する可能性がある。



24 年 9 月の生産指数を 10、11 月の予測指数で先延ばしすると、24 年 10-12 月期の生産は前期比

6.1%の高い伸びとなる。しかし、実際の生産の伸びは計画を大きく下回る傾向があるため、現時点ではこの数字は当てにならない。鉱工業生産は増産と減産を繰り返しており、22年以降は2四半期続けて増産となったことがない。先行きについては、自動車の挽回生産が期待できるものの、中国向けを中心に輸出の低迷が続く公算が大きいこと、電子部品・デバイスの牽引力が弱まることから、当面は一進一退の動きが続くことが予想される。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません